

文献による臨地実習で看護学生が感じる困難

Difficulty Felt by Nursing Students in Clinical Practice by Literature

小笠原 陽 子

要約 臨地実習において看護学生がどのような困難を感じているのか文献調査をし、実習指導の示唆を得ることを目的とした。学生が抱く困難として①「知識に関連した要因」、②「対人的要因」に分類した。それぞれの困難を感じる内容として、①看護実践・記録・事前学習・カンファレンスの4項目で、②患者との関係・指導者との関係・教員との関係・学生同士の関係であった。学生が困難と感じている内容を教員は十分理解をして臨地実習の成果を高めていく関わりが求められた。一方この困難と感じていることは、学生が教員に指導を求めていることが推察された。また臨地実習において学生が困難と感じている要因は知識と対人関係にあることから、教員は学習面と精神的サポートが重要であることが示唆された。

I. はじめに

看護の知識を実践能力へと導いていくため臨地実習は、看護教育授業として重要な位置づけになっている。看護実践には援助的人間関係能力及び知識を基盤とした専門職としての役割や責務の学習があり、臨地実習の場で大きく成長していくものとする。

近年の少子高齢化社会や高度医療、また経済のグローバル化の中で社会の看護職への期待は一層高まっている。このような背景のも

と文部科学省は2011年「大学における看護系人材育成の在り方検討会」において看護学生の実践能力や卒業時到達目標を示した¹⁾。激動の社会の要請に応えるべく、質の高い看護系教育への貢献が求められている。

看護実践を提供するためには幅広い知識・技術・倫理観が求められる。臨地実習において学生は直接患者と関わることで、実際の看護について学び看護の考え方を深めていくこ

とができる²⁾。看護問題解決のための看護行為は、複雑で高度の思考と活動を要する。このように体験を通して看護実践力の基礎を作り、看護職としての基本的な姿勢を学ぶ場となるのである。

先行研究において、看護学生が臨地実習で看護技術に関する不安や、記録・看護過程の展開、人間関係への不安が強いことが報告されている³⁾。学内演習とは違い、臨地実習では初めての患者への対応や看護援助の提供など、学生が持つ知識技術・援助方法に困難を感じることが考えられる。実習はグループ体制で臨み、そのことによる人間関係や、異な

る実習施設による不安なども考えられる。実習中の欠席や、記録の遅れ・実習意欲が感じられない学生がいる。学生のほとんどは青年期であり、この時期は精神的にも不安定であることを理解しておく必要がある¹³⁾。このように多岐、複雑な状況の中で学生の臨地実習は行われている。

学生の臨地実習成果が高まるよう体験学習を効果的に支援することが教員・指導者の責務になる。看護学生は臨地実習においてどのような困難を抱えているのか文献から概観し、今後の臨地実習指導の示唆を得ることができると考える。

II. 研究目的

看護学生が臨地実習において困難と感じていることを文献から明らかにし、検討するこ

とで今後の臨地実習教育の示唆を得る。

III. 研究方法

1. 文献研究

文献は医学中央雑誌 Web を用い、キーワードは「看護学生」「臨地実習」「困難」で選出した。一部これに「ストレス」を加え、1999年から2015年までの原著論文10を対象とした。文献のタイトルと要約を参考にして選出した。

2. 対象

10文献を発行年、タイトル、掲載誌、研究目的、臨地実習における困難の内用を抽出した。さらに10文献から「臨地実習にお

ける困難」と「ストレスに感じたと思われる事象に関して内容が具体的にわかるものを筆者が抽出し【看護実践】【記録】【事前学習】【カンファレンス】【患者との関係】【指導者との関係】【教員との関係】【学生同士との関係】の8項目に分類した。8項目を「知識に関連した要因」と「对人的要因」の2つに大別し抽出された内容を質的に分析した。

3. 用語の定義

本研究における困難とは、看護学生が臨地実習において、難しい・苦勞すると感じてい

る事、及び精神的・肉体的に負担となっている状況と捉えた。

IV. 結 果

1. 文献の概要（表 1）

文献の研究方法は、質問紙によるものが7件、面接法1件、文献1件、生体情報1件であった。調査対象校は、看護系大学7件、短期大学2件、専門学校1件であった。対象大学生として、4年次1件、3年次5件、2年次1件、であり短期大学性は3年卒業後1年と、2年課程卒業直後を対象としていた。専門学校生は3年生を対象としていた。実習履修時期として「基礎」後が2件、「成人」後3件、「老年」後1件、短期大学は「急性期」後1件、「成人・老年」後1件であった。

2. 臨地実習で学生が感じる困難（表 2）

困難の内訳は、内容別に34項目を抽出しこれを2つのカテゴリー「知識に関連した要因」と「対人的要因」に分け、さらに8つのサブカテゴリーに分類した。

1) 「知識に関連した要因」によると思われる臨地実習で学生が感じる困難を【看護実践】【記録】【事前学習】【カンファレンス】の4つのサブカテゴリーに分類した。

【看護実践】においては、日々変化していく患者の状況に適切な援助ができないという困難を抱えていた。また、援助が安全に実施できるのかという不安もみられた。生体情報の測定を用いた文献では、未知の体験である援助前や実習初期が学生の緊張を高めていた（文献8）。

【記録】においては時間がかかる、看護計

画立案や評価、また日々の行動計画が抽出された。記録にかかる時間に関して強い不安を持つ学生が99.4%との結果が示されていた（文献10）。実習中一番目に困難と感じたことは記録で、書き方が分からないや書く力がないという困難感があった（文献1）。また、学内演習での技術や限られた時間での知識で日々の行動計画を立てて実習に臨まなければならない項目も抽出されていた（文献5）。看護過程の展開に関して、情報を整理してアセスメントすることが難しいという内容が記録を困難にしていた（文献5,7）。

【事前学習】においては、病態や治療に関する知識不足があり、患者に必要なとされる援助ができないという困難が抽出された。知識不足があり疾患を理解することが難しいと感じていた（文献1）。一方臨地実習における看護学生のストレス度の調査において看護能力に関する項目の分析で、知識・技術においてストレス度が高かった（文献3）。またストレスと疲労自覚調査によると、臨地実習において「病気や治療の知識がなく困った」において意欲低下・だるさの自覚症状について有意差が認められていた（文献6）。

【カンファレンス】において活発に意見を話せるのかや、緊張をすることから困難を抱えていることが抽出された。カンファレンスの存在自体が困難（文献7）、臨地実習においてグループで看護問題に取り組み、問題解決能力の成長の機会にもなるカンファレンス

表1 対象文献

番号	発行年数	著者 表題 掲載誌	方法 対象	研究目的	臨床実習における学生が感じる困難
1	2007	三枝香代子、成人看護学実習において学生が体験する困難 千葉県立衛生短期大学紀要26	質問紙 短期大学3年課程卒業直後148名、2年課程卒業直後38名	筆者が担当した学生実習中に困難と感じたこと	<ul style="list-style-type: none"> ・記録の量が多い、書く力がない、時間が足りない ・学習準備に関する事、他の多くの課題と記録の両立、疾患の理解 ・看護計画立案 ・患者に合った看護の工夫
2	2015	中本明世他、臨床実習における学生の困難感の特徴と実習状況による困難感の比較 千里金蘭大学紀要12	質問紙 基礎履修した2年生82名 成人I・II履修した3年生95名	臨床実習における学生の困難感を明らかにする	<ul style="list-style-type: none"> ・看護過程展開：立案、評価 ・カンファレンスの運営と討議：活発に意見を出せるか ・患者との関わり：患者と関係性を持ち向き合えるか ・指導者との関わり：アドバイスが速い戸惑う、看護師が忙しそうで声をかけられない ・看護援助：効率的に、思うようにケアができない
3	2005	加島亜由美他、臨床実習における看護学生のスプレッサーとその対処法、九州看護福祉大学紀要71(1)	質問紙 看護4年次学生96名	臨床実習における学生のスプレッサーを明らかにし、その対処法を把握し実習における学習意欲を上げる方法を検討する	<ul style="list-style-type: none"> ・看護能力不足：知識や技術の不足あり適切に情報収集できない、状況変化に対応できない、病態や検査知識不足 ・指導者教員の質問に答えられない、助言や指導が得られない ・グループ学生：情報交換や協力体制ができない ・患者家族に信頼されていないと感じる、情報を上手くとれない、自分の発言で不快にさせた
4	1999	布佐真理子、臨床実習において看護学生が看護上の判断困難を感じる場面における指導者の働きかけ、日本看護科学会誌19(2)	半構成面接 成人・老年実習終了3年生12名	場面臨床実習中に看護上の判断に困難を感じる場面に 対して臨床状況の理解や対処を助ける指導者の働きかけを明らかにする	<ul style="list-style-type: none"> ・患者への接し方：患者や家族の状況の受け止め方 ・看護の在り方：日常生活のケア、教育方法、自立や離床の援助、心理的苦痛の看護 ・患者との関係：患者の拒否的態度にどのような関係を築いてらよいか
5	2015	金子小百合他、基礎看護実習における看護学生のスプレッサー因子構造と対処行動、名古屋私立大学看護学紀要14	質問紙 2年次基礎看護実習前 後学生158名	基礎看護実習における学生 のスプレッサー因子構造を解明し スプレッサー対処行動の関連性を明らかにする	<ul style="list-style-type: none"> ・看護過程の展開：問題点を抽出するための関連図、計画 ・教員や指導者に報告や指導に関する事、ケア実施時のサポート ・患者や家族とのコミュニケーション ・学生同士の関係 ・疾患や治療に関する知識 ・日々の行動計画 ・カンファレンススの準備、発表

番号	発行年数	著者 表題 掲載誌	方法 対象	研究目的	臨地実習における学生が感じる困難
6	2014	廣瀬真美他、看護学生の臨地実習中におけるストレスと疲労目覚症状との関連、インタナーショナルNursing Care Research 13(3)	質問紙 大学看護学科3回生	看護学生の臨地実習におけるストレスと疲労目覚症状との関連を明らかにする	<ul style="list-style-type: none"> 記録に時間がかかる 病態、治療の知識がない 看護や処置にミスをしそう 指導者や教官の質問に答えられない 報告する看護師がみつからない 指導者に怒られた
7	2011	千田寛子他、成人看護実習における看護学生の抱える困難感の分析、群馬保健学紀要 32	文献 20 件	論文から学生の实習に対する動機づけを高めるための知見を得る	<ul style="list-style-type: none"> 看護援助を一人ですることや患者に合わせた援助をすること 患者との接し方や思いを理解すること 未告知患者との接し方 意識障害患者との接し方 指導者の指導内容が異なること 指導者の言葉や態度が冷たい 指導者に声をかけること
8	2009	二宮寿美他、看護学生が臨地実習に示す生理的ストレス反応と対人対応能力との関連、日本看護学教育学会誌 19(2)	ストレス反応 (ROMS) 指尖皮膚温 唾液アミラーゼ、専門学校生 3 年生 20 名	学生の臨地実習中のストレスを心理的・生理的に検討、学生の対人対応能力とストレス反応の関連	<ul style="list-style-type: none"> 未知の体験が緊張を高める。(VS 測定や報告、コミュニケーションの援助前、実習初期) カンファレンス場面で緊張と不安
9	2011	奥百合子他、看護学生の臨地実習におけるストレスと睡眠時間との関連、岐阜医療科学大学紀要 5	質問紙 看護大学 3 年生 95 名	看護学生のストレス内容と睡眠時間との関連	<ul style="list-style-type: none"> 家族の感情的や無茶な要求への対応 報告したい看護師がみつからない 看護師が忙しく報告できない 記録に時間がかかる
10	2006	本田茂美他、急性期実習に対する学生の困難と達成感の一考察、帝京平成看護短期大学紀要 16	質問紙 3 年生 175 名	急性期実習に対する学生の思いや正直な声をきく	<ul style="list-style-type: none"> 記録に時間がかかる 患者の回復過程の変化が早い 相談したい教員不在 痛みのある患者への関わりや援助

表2 臨地実習で学生が感じる困難

	分類	内容 (文献番号)	件数
知識に関連した要因	看護実践	患者の状況に合った援助ができない (1) 想定していたように効率的に出来ない (2) 状況の変化に対応することができない (3) (10) 日常生活のケアや患者教育、痛みのある患者、心理的苦痛を抱えた患者の看護 (4) (10) 患者の状況に合わせて安全、安楽に看護を提供すること (7) 援助や処置でミスをしなかつたかの恐怖 (6) 未知の体験への緊張、不安 (8)	9
	記録	書く力がなく苦手、時間がかかる (1) (6) (9) 看護過程の展開 (2) (5) (7) (10) 日々の行動計画 (5)	8
	事前学習	たくさんの課題と記録との両立 (1) (7) 知識、技術等看護能力不足により患者情報収集が適切にできない (3) 患者が必要とする援助ができない (3) 病態や治療に関する知識不足 (5) (6) (9)	7
	カンファレンス	活潑に意見を出せない (2) (7) (8) 準備や発表 (5)	4
対人的要因	患者との関係	患者とコミュニケーションがとれ向き合うことができるのか (2) (5) (7) (8) 患者や家族から信頼されていないと感じる (3) 患者や家族の状況の受け止め方 (4) (7) (9) 患者の拒否的態度にどのようにしていけばいいのか (4) 未告知患者との接し方 (7) 患者に無理な要求をされる (9)	11
	指導者との関係	指導内容の違いに戸惑う (2) (7) 看護師が忙しそうで声をかけていいのか (2) (9) 質問に答えられない (3) (6) 適切な指導や助言が得られない (3) (5) (4) 看護師が忙しそうで報告ができない (5) (6) (8) (9) 学生に対し看護師の言葉や態度が冷たいと感じる (7) 指導者に怒られた、欠点を指摘された (4) (6)	14
	教員との関係	報告や指導に関する事 (5) 必要な時に質問や相談ができなかった (3) (10) 質問に答えられなかった (3) (6) 適切な助言や指導を得られなかった (3)	6
	学生同士の関係	グループ内で情報交換がうまくできない (3) (5)	2

に困難を感じていたことが抽出された。またカンファレンスの準備や発表をすることもストレス因子となっていた (文献5)。生体情報の生理的変化としてもカンファレンス場面において緊張・不安状態が示されていた (文献8)。

2) 「対人的要因」によると思われる臨地実習で学生が感じる困難として【患者との関係】【指導者との関係】【教員との関係】【学生同士の関係】の4つに分類した。

【患者との関係】においては、患者とコミュニケーションがとれ、向き合うことが出来る

のか困難を感じていた。傾聴・共感が重要と分かっているにもかかわらず（文献2）。ストレス要因としても「患者に無理な要求をされる」「家族の感情的欲求」が学生の睡眠に有意差を生じていた（文献9）。意識障害患者は反応がなくコミュニケーションがとれないことや、未告知患者の接し方がわからないが抽出された（文献7）。

【指導者との関係】では、指導者によりアドバイスの違いに戸惑うことや、看護師が忙しそうで声をかけにくいことが抽出された。また、学生の投げかけにアドバイスがないことや、欠点を指摘されるがあった（文献4）。一方、指導者の質問にうまく答えられないことへのストレス度が高かった（文献3）。学

生に対し看護師の言葉や態度が冷たいと感じていた（文献7）。10文献中8文献において指導者との関係に「困難」がみられた。

【教員との関係】において、適切な助言や指導を得られないと感じていた。また必要時に教員に質問できないことや、教員の質問に答えられないことがストレスになっていた（文献3）。ストレス因子構造の調査においても、教員への報告・サポート不足が抽出されていた（文献5）。

【学生同士の関係】実習グループメンバーとの協働や、情報交換がうまくできないが抽出された。また、病棟の電子カルテを閲覧できるパソコンの共同利用に関する内容もあった（文献5）。

V. 考 察

臨地実習において、看護学生は「知識に関連した要因」と「対人的要因」に困難を感じていることが明らかになった。患者が持つ複雑な看護問題の解決法を、臨地実習である体験学習から学んでいくことに、看護学生は緊張と不安を持ち臨んでいることが推察された。

1. 「知識に関連した要因」として【看護実践】【記録】【事前学習】【カンファレンス】の4項目であった。

【看護実践】の能力を確実に習得していくため、臨地実習は重要な看護教育である。看護の初心者である学生が困難と感じている看護実践は、状況に応じた行動ができないため当然のプロセスと考える。患者は日々、心身

ともに変化をしていく。この変化は臨床で学習できる貴重な体験であり対象の理解に繋がることである。学生が困難と感じている事でも「変化する対象を理解できた」との学びに変えるような関わりが必要であると考え。看護援助前の困難感については、実習前の学生の脅威が実習後は有意に軽減したとの報告があり、教員は看護実践を導くとともに実習前演習の充実が必要である³⁾。

【記録】は、看護実践の一連の過程を示すもので、基礎的・専門的理解やアセスメント力など広い知識を必要とする。記録は実習中の看護実践の軌跡を示し、学生の思考と行為を明らかにするものであると定義されている⁴⁾。日々の記録や看護過程の展開を通して学生の思考の結果を表現することになり、学

生にとって多くの労力を使うことになる。記録に時間がかかることや、書く力がないとした事項は、学生の思考の基礎となる専門的知識が影響していることが考えられた。更に学生は情報収集をしても、情報の整理やアセスメント力がなく記録を困難と捉えていることが考えられる。看護学実習指導者において学生への指導で困難を感じている調査で酒井⁵⁾は、看護過程や実習記録の指導に関することが全体の57.9%と高い結果を示していた。臨地実習の教員による記録の指導は学生の主体的・能動的学習活動を支援するための教授活動であり、学生の学習活動の促進になっている⁶⁾。学生が実習記録を困難と思う感情から、意欲へ繋がるような指導が求められるが、看護過程展開は教員の支援が必要であることを示している⁶⁾。

【事前学習】において病態や治療に関する知識不足は患者情報を適切に整理できない等、アセスメント力が影響し記録に関連した困難であると推察される。事前学習の取り組みによる学生の不安は、自分の知識・技術についてであった⁷⁾。このことから、学生の自己学習と合わせて指導内容や学内演習を充実させることが求められる。

【カンファレンス】はグループダイナミックスを育み、問題解決能力を養い臨地実習において重要な学習である。活発な意見発表ができないことや、準備に困難を感じていた。カンファレンスは学生が主体的に取り組むことが多く、学生にとってストレスフルな体験であることを知った関わりが必要とも言われる⁸⁾。学生の知識不足が発言力に影響していることも推察される。カンファレンスの運営の指導をし、臨床指導者とも調整・合意を持

ち関わっていくことが大事である。また、社会人基礎力¹⁶⁾を伸ばし育てることに繋がり、カンファレンスをグループダイナミックスの育成とも捉え、自信を持たせられる関わりが必要とも考える。

これらの困難を学生は持っていることを理解して、達成感に変えられるような指導が求められる。看護過程を中心とした専門性の高い「困難」に対し、論理的な思考を育むことも必要ではないかと考えた。

2. 「対人的要因」では【患者との関係】【指導者との関係】【教員との関係】【学生同士の関係】が抽出された。

【患者との関係】においては、コミュニケーションが取れるのかに関して困難を感じていた。コミュニケーションは患者のニーズを把握し、信頼関係を築くという看護を提供する上でスタートとなる。実習の初期において学生は不安や緊張が高い中にあるため、患者の言葉や表情から、患者の気持ちを読み取ることの難しさが考えられる³⁾。患者の個性を尊重した関わりは重要である。しかし学生自身も患者に対してのメッセージなど言語的・非言語的コミュニケーションで発信しており、相互に自分の気持ちや考えが伝わることになる。阿部⁹⁾は、看護学生は患者とのコミュニケーションの自己効力感に正の相関が示されたとの報告がある。また患者と看護学生の関係は実習の進展に伴って、その距離が縮まることが考えられている¹⁰⁾。そのためには、小さな成功体験を認識させるような助言やコミュニケーション体験を多く持てるようにすること、また学生と患者との関係構築を見守りサポートしていくことが教員の関わりとし

て重要で、それが患者理解に繋がると考える。

【指導者との関係】では「忙しそう」「指導が得られない」などが抽出された。実習指導者は患者の看護について具体的に指導し、カンファレンスや記録を通して助言・評価をしてくれる。病棟は7:1看護体制による在院日数短縮や安全管理など業務が多忙である。看護学生の指導は看護師の定数配置になっておらず、受け持ち患者を持ちながら学生指導を兼務している現実が多く、学生にマイナスのイメージの影響を与えているとも考えられる。一方高塚¹²⁾は臨床指導者のモデルの視点から、看護師としての経験のみならず臨床指導者としての経験の必要性を述べている。実習指導者自身も指導力の過小評価や学生・教員との人間関係に困難があるとの報告もある¹¹⁾。更に実習指導者は、看護学生がストレスの高い実習環境の中で看護過程を展開していることを認識する必要性が指摘されている¹⁴⁾。学生の学習状況および実習到達度の共有や指導体制について双方の理解が重要と考える。また「冷たい・怒られた」などの感情的な気持ちを抱くことは、実習への戸惑いや不

安の増強になりかねない。学生の状況を見守り精神的サポートが必要と考える。

【教員との関係】において、指導や助言についての項目が多かった。学生は身近な教員に対して安心感を持ち、知識面において困難感を持っていることから指導を求めていることが推察される。学生は、教員に看護過程展開に必要な知識や判断力を求めている¹⁵⁾。教員は学生に対して、論理的な学習への支援をする必要性が示唆された。

【学生同士の関係】実習グループは共に過ごす時間が長く、ストレスの多い状況にあるのではないかと考える。グループ内で情報交換がうまくできないという状況は、学習に影響されることも考えられる。グループダイナミックスを発揮できるよう教員はグループの状況を把握し、学生が安定して実習が継続できるよう関わりが必要と考える。

良好な人間関係は、生産性を高めると言われる。教員はそれぞれの立場を理解し調整をしながら、学生の困難感を軽減できるよう精神的な関わりが必要と考える。

VI. お わ り に

1. 臨地実習において看護学生が困難と感じていることについて、国内の10文献を検討した。困難と感じている内容を2つに大別した。①「知識に関連した要因」として【看護実践】【記録】【事前学習】【カンファレンス】であり、②「対人的要因」では【患者との関係】【指導者との関係】【教員との関係】【学生との関係】であった。

2. 教員は、学生が抱えている困難と感じている内容を充分理解して臨地実習の指導を行い、実習成果を高めていくことが必要である。困難と感じている項目は、学生が教員の指導・助言を求めており学習面と精神的サポートの両方の支援が必要であることが示唆された。

3. 実習前準備・学内演習に「知識に関連

した要因」を十分取り入れた指導が必要と考 関係」については施設の状況把握や指導者との調整が必要である。

4. 学生が困難と感じていた「指導者との

引用文献

- 1) 文部科学省：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会
www.mext.go.jp/bmeun/shingi/chouse/1302921.htm 2017/9/1
- 2) 塩川華子、中島五十鈴、青井聡美、他：臨地実習の学びをより促進させる教員の関わり方—基礎看護実習Ⅰ終了後のアンケート調査から— 広島県立保健福祉大学誌 人間と科学 2(1) 53-63 2002
- 3) 重岡秀子、池本かづみ、石崎文子、他：成人看護実習前・後における学生が感じるストレス感情と不安状態の実態 健康科学と人間形成 Vol.17-26 2016
- 4) 日本看護協会 看護業務基準 公益社団法人日本看護協会 2016
- 5) 酒井貞子、中澤紀代子、石田和子、他：看護学実習指導者が感じている指導上の困難と学習ニーズ 新潟県立看護大学紀要 4: 12-16 2015
- 6) 高橋裕子、松田安弘、山下暢子、他：看護学教員による実習記録へのフィードバックに関する研究 群馬県立県民健康科学大学紀要 9: 13-33 2014
- 7) 籠玲子、佐藤美紀、大津廣子、他：事前学習の取り組みによる基礎看護学実習前の看護学生の不安の変化 愛知県立大学看護学部紀要 Vol.19. 61-66 2013
- 8) 足立はるゑ、堀井直子：2013 臨地実習指導サポートブック pp.67-68 メディカ出版 大阪
- 9) 阿部智美：患者とのコミュニケーションにおける看護学生の自己効力感 宮城大学看護学部紀要 11(1) 2008
- 10) 岩井浩一、落合幸子、本田陽子、他：臨地実習における患者—看護学生の構築に関する研究 茨城県立医療大学紀要 11 123-135
- 11) 二十軒温美：看護学先行研究からみた臨地実習指導者の現状と課題 園田学園女子大学論文集 51 53-60 2017
- 12) 高塚由香里、永井由美子、山川正信、：看護学実習における臨床指導者の役割に関する研究 大阪教育大学紀要第Ⅲ部門 63(1) 103-111 2014
- 13) 平岡恭一：青年期の心理的特徴と近年にみられる変化 日本看護研究学会雑誌 Vol.16 No.1 1993
- 14) 小笠原知枝：看護学生の臨地実習と実習評価 関西看護医療大学紀要 6(1) 2014
- 15) 藤本裕二、山川裕子、中島富有子、：看護学生が臨地実習において教員および看護師に求

める資質と能力 保健学研究 23(1) 9-16 2011

- 16) 箕浦とき子、高橋 恵：看護職としての社会人基礎力の育て方 日本看護協会出版会
東京 2014